令和４年度二本松北小学校　学校だより　Ｎｏ．５３

輝け！北っ子！

令和４年１０月２８日

文責：校長　大内雅之

こんな新聞記事を見つけました
～エビデンス（根拠）をもって～

１０月２７日付けの福島民友に「子を叱るときは励まそう」という記事を見つけました。
（記事は下に示しましたのでご覧ください。）

子を叱るときは励まそう

神戸大・同志社大研究チーム

褒め方・叱り方が子どもの将来に与える影響

褒め方	良い影響	叱り方
・「頑張ったね」		・「次は頑張ろうね」
・「偉いね」		・「どうしてできないの」
・褒美をあげる		・罰を科す

育ちを分析、自立心に好影響

子どもを叱る際「次は頑張ろうね」と励ました方が、原因を追及したり罰を科したりするよりも成人後の自立心や計画実行能力に良い影響を与えるとの研究結果を神戸大と同志社大のチームが26日、発表した。

チームによると、2021年3月、インターネット上で全国の20歳から70歳未満の男女を対象にアンケートを実施。約1300人の回答を分析した。

子どもの頃の叱られ方について「次は頑張ろうね」「どうしてできないの」「罰を与えられた」の3グループに分類。進学先や就職先をどの程度自立的に決めたかや、計画を立ててやり通す力、法令順守精神などを四つの指標とし、1300人の回答を数値化して比較した。

叱られた際「次は頑張ろうね」と励まされたグループは全ての指標で最高となり、「どうしてできないの」「罰を科された」の順に低下した。子どもが親の目を気にして親に従属しやすくなった可能性があるという。

褒め方については「頑張ったね」と努力を評価したのが最高で、「偉いね」「褒美を与えた」の順に低下した。チームの西村和雄神戸大特命教授は「いろいろな叱り方のメリットやデメリットを意識することが重要だ」としている。

私が考えさせられたのは「エビデンス」ということでした。エビデンスとは、最近よく聞くようになった言葉の一つかもしれませんが、次のような意味です。

> エビデンス（evidence）は、主に「証拠」「裏付け」「科学的な根拠」「検証結果」などの意味で用いられる語。英語の evidence をカタカナ表記した外来語である。ビジネスシーンをはじめ、政治・医療・介護など、幅広い分野において用いられている。より簡単に、わかりやすくいうとエビデンスとは、要するに「提案・主張・判断などの確かさの根拠・証拠となるもの」のことである。
>
> 「エビデンスのある物事」は、そのエビデンスが「実はエビデンスとして有効でない」ことを示す以外には、否定する余地がない。あるいは理不尽な理由で否定するしかない。エビデンスの対極にある要素（なかば対義語）としては、「勘」「好み」「憶測」「思いつき」「迷信」「主観に基づく判断」「経験則」などが挙げられる。
>
> ※ https://www.weblio.jp　より

つまり、効果が実証されているということです。教育においても、家庭でのしつけ等においても願いは同じ「子どもの豊かな成長」。であるならば子どもへの対応はより効果が高いもの、効果が実証されてるものを使うべきだと思うのです。頭では・・・。

しかし、「そうはいっても子どもを叱るときは、感情が先走ってしまって・・・。」「これまでの経験からすれば・・・」という声が聞こえてきそうです。恥ずかしい話、私自身もそうです。そんなに聖人君子のような対応ばかりできるはずもないし・・・と言い訳してしまいます。しかし、一方では、根拠のある事実に基づいた対応をとるべきだとも思っていますし、自分の経験などちっぽけなことであることも自覚しています。私はせめて、効果のある、なしを「頭ではわかっている」だけでも大事だし、その場に出くわしたときの「感情のコントロール」に役立つのかなと考えています。皆さんはいかがでしょうか。